

### 保育と子どもを取りまく状況 ③

園長 片山喜章

「子どもたちの体力低下」が訴えられて久しく時が過ぎています。その解消手段として、当法人に共通している運動プログラムとして「サーキット運動」というものがあります。

下記は、この4月からスタートした大阪府寝屋川市の認定こども園でのエピソードです。初対面の私に対して子どもたちは興味津々でしたが、遊戯室いっぱいW字コースに様々な体育遊具が設定されているのが目に入ると、すぐにその目は、きらきら輝きだしました。

「スタート」で子どもたちは、勢いよく全身を動かしてコースを周回します。この運動は、運動量をしっかり摂ること＝長い時間、運動する事ではなくて、20分くらいの時間でも、休みなく動き続ける。じっとしていることが嫌いな子どもたちの生理的な欲求に応える＝それが第一の目標です。そして、第二に、多様な動きを経験すること＝走しる、駆け上がる、駆け下りる、くぐる、渡る、またぐ、跳び乗るなどなど、遊具の組み合わせやちょっとした工夫で動きのバリエーションを増やして「動きのデパート」をめざします。

私自身、1976年から指導経験を重ねていますが、時を経るほどに「サーキット運動」の保育としての奥の深さを実感します。「やらせ」と揶揄するセンモンカもいますが、子どもたちが、なぜすばらしい表情を浮かべ、何度もくりかえしたがるのか“不思議”です。その不思議の正体をあれこれ紐解いていると保育が、そして子どもというものが見えてきます。

例えば、ハシゴを渡る場合、足場を渡る子、足場をまたぐ子、両端を縦に渡る子、その子なりに色々な渡り方をする場合、貴方が指導者なら、どうしますか？「手を添えてでも足場を渡るように導きますか？」「好きに任せますか？」 実際、そのとき、そこにかかわる職員から質問を受けました。正解がないのが保育の世界の理ですが、その子自身がハシゴと向き合って、自分なりの動き（ハシゴとのかかわり）を考えて、試して動いている価値ある姿と認める心持ちが大事です。それを承知したうえで、また子どもとの関係性が十分築かれて、しかも、何か月も、はしごの足場をまたぐだけだったら、寄り添って、足場を渡るように促して、導いても良いと考えます。そこが、保育の教育的な側面ということになります。

そして、翌週も実施しました。汗いっぱいの子どものなかに「もう、おしまい」になったとき、「まだしたい」と泣きだしてダダをこねる姿もありました。しかし、もっとも感動したのは、ふだん並ぶ場合、「自分が前、前」となりがちな子どもたちが、跳び箱の両足踏み切り腕立て開脚乗りをするコーナーでは、1列に整然と並ぶ姿が見られたことです。運動量が、保障され、様々な動きを経験し、愉悦感、満足感を味わうと「道徳教育の復活」を安易に、唱えなくても（とても危惧しています）、自然な形で規範意識も体得するのでしょうか。